百々裏話（6）

おもてあきら

三井寺

小書の「無俳之伝」は「ヲカシナシノデン」と読む。この小書演出がいつごろできたものかは知らないが、妙な字を宛てて妙な読ませ方をしたのが明和改正謡本で有名な十五代の観世大夫元章であることは、まず間違いないことであろう。狂言の役者を「をかし」と呼ぶ例は、世阿弥の自筆謡本や習道書に既に見えており、慶長頃までの謡本でも間狂言のセリフには「ヲカシ」と役名を肩書してあるのが普通であって、ヲカシは別に珍しい呼び方ではない。ただそれに「俳」の字をあてたのは元章が最初であろう。彼は能の役々に次のような文字をあてているのである。

大夫	シテ
佑	シテツレ
佐	ワキ
属	ワキヅレ
俳	ノカシ（間狂言）

大夫をシテと読ませるのだけは以前にも例があるかも知れないが、それ以外は元章が使いはじめたものであろう。明和二年の改正謡本ではまだこの文字を使用せず、明和九年の刊本習道書では採用しているところを見ると、晩年から使い出したようでもあるが（元章は明和九年の翌々年五十才没）、元章には早くからこんな文字をあてて喜んでいるような妙な好みがあったようで、その種の好みが強く出すぎたことが、明和の大改正の失敗に終った大きな原因ではなかったかとも思う。

さて、無俳之伝は、清水寺に参籠して霊夢を蒙った前シテのところへ夢判断にやってくる間狂言を省略した演出である。三井寺には前段で夢占をする宿の亭主と、後段の鐘をつく能力と、二人の間狂言が登場する。能力の方もかなりに活躍するが、間狂言の形式としては前者の方が珍しい。天正狂言本の「八房」（今の瓢の神と同じ趣向。清水寺に参籠した二人の鉢叩に夢の告げがある）に〝夢想御ふく合せん〟と言う人物を登場させるのなども三井寺の間狂言の形式をまねたものに相違あるまい。どのような意図からこの間狂言をはぶいてしまったのか、どうも私にはわかり兼ねる。時間的にさほど短縮されるわけでもあるまいし、装束や型を替えることも夢占を出さないことと直接には関係が無い。あらかじめ三井寺の梗概を承知している観客を対象として演じられる今の能では、夢占が出ようと出まいと同じことなのかも知れないが、出ないと具合の悪い面もあるようだ。前段の場所が清水寺であることも、間狂言が「清水寺門前の者」と名乗ればすぐわかるが、それが無いとちよっと理解しにくい。冒頭のシテのサシ謡〝南無や大慈大悲の観世音さしも草〟から直ちに清水観音の御神詠と言われる「ただ頼めしめぢが原のさしも草われ世の中にあらんかぎりは」の歌を想起し、〝枯れたる木にだにも花咲くべくは……〟の上歌が、千手観音の誓願をたたえた文句であることに思い及んで、直ちに場所が清水寺であることを知るほどには、観客は敏感でない筈である。どうも無理な小書であるように私には思われる。観世元章はいろいろの小書演出を考え出した人物であるから、無俳之伝も彼が創始したのかも知れない。彼は「副言巻」と題する改作間狂言集を十一冊も刊行しているほどであるから、間狂言の改革に大きな熱意を持っていたに相違なく、三井寺の夢占にどこか不満があって、それをはぶいた演出を考え出したことも、十分ありうることであろう。

三井寺は世阿弥作と言うことになつているが確証は無い。申楽談儀に

近比、将軍家御前にて、人の〔原注「三郎也」〕かねの能をせしに、南おき成に、かねを右のかたにをく、左かねにつきし也。いく度も左にをきて右かねにつくべし

とある「かねの能」と言うのは三井寺のことらしい。世阿弥に非難されている三郎（音阿弥）は、寛正五年の糺河原勧進猿楽の第一日にも三井寺を演じており、これが演能記録としては最も古い。金春禅竹の歌舞髄脳記（康正二年著）にも「三井寺　正花風　景曲躰などいふべき哉」とあげられているから、早くから人気曲の一つであつたようだ。

葵　上

昔はこの曲を禅竹作とする説が有力であつたが、世阿弥の「五音」に節附者名なしで一声の文句が記載されていることから、近くは世阿弥作と考える説が有力である。しかし、世阿弥の先輩である近江猿楽の犬王道阿弥が演じているのであるから、世阿弥作とすれば応永二十年以前の作と考えねばならず、申楽談儀の作者附に記載が無いことや、曲柄からみて古作の匂が強いことなど、世阿弥以前からあつた曲と考える方が妥当であろう。

世阿弥の頃の葵上が今とはかなり異なつた演出であつたことは、申楽談儀の記事によつて明らかであり、野上博士の「大臣柱」などに精しい考察がある。犬王が葵上を演じた時には、橋がかりに車の作り物を出し、シテのほかに車そえの女人がシテツレとして登場していたと言うのであるが、現在のツレ照日の巫女の謡に「不思議やな誰とも知らぬ（観世は見えぬ）上臈の破れ車に召されたるに、青女房とおぼしき人の、牛もなき車の轅に取りつき、さめざめと泣き給ふいたはしさよ」とあるのだから、申楽談儀の演じ方が正しい。この曲など能が長い間にいろいろ変化している例にあげうる曲であろうが、大改作の後になつても昔のままの文句を巫女に謡わせている点は、能が悪い意味で固く伝統を守つてきたことの例であろう。改作後は巫女の幻覚に生じた光景として描いたもので、見物人の想像に訴えるようにしたものであるなどと、善意に解するよりも、無雑作な改作から生じた不手際と見る方が素直であろう。葵上一番の演じ方の中に、能の歴史が圧縮されていると言つてもよいのではなかろうか。（6・2）



